



## 世界エイズデー in POM

### — ブースとラジオで届けたメッセージ

皆さま、こんにちは。

国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）パプアニューギニア国事務所に派遣されている、松山赤十字病院看護師の木本です！

昨日、12月1日は World AIDS Day（世界エイズデー）でした。

HIV／エイズに関する理解を深め、差別と偏見をなくしていこうという思いを新たに  
する日として、世界各地でさまざまな啓発活動が行われています。

#### REPORT

#### 数字で見るHIVの現状

世界では現在、約4,080万人がHIVとともに生きており、2024年だけでも約130万人が新たに感染したと推計されています（UNAIDS 2025）。

また日本でも、2024年の新規HIV感染者662例とAIDS患者332例、あわせて994件が報告されており、新たに報告されたHIV陽性者・AIDS患者の数としては2年連続の増加となっています。（国立感染症研究所 2025）。

そしてここパプアニューギニアでは、2024年だけで推定約11,000人が新たにHIVに感染しており、1日あたり約30人が新規感染している計算になります（UNAIDS Asia Pacific, 2025）。

HIVはパプアニューギニアでも依然として大きな課題だと感じました。



©HIV.GOV



NACマネージャーとの打ち合わせ

#### 「学んで、あとで振り返れる」仕掛けづくり

こうした状況のなか、首都ポートモレスビーでは、National AIDS Council（NAC）を中心に、World AIDS Day の活動が行われました。

私はパプアニューギニア赤十字社の保健担当であるルマナさん、ルーシーさんと一緒に事前ミーティングに参加し、当日の流れや赤十字としてどのように関わるかを話し合いました。

その中で、「せっかくブースを出すなら、HIVの知識だけでなく、簡単なクイズ形式で学べて、あとから振り返れる仕組みもあると良いね」という話になり、ルマナさんにクイズの内容を作ってもらい、それをオンラインで実施できる形にしました。

今回も World Diabetes Day のときと同様に、パプアニューギニア赤十字社と一緒に配布カードを作成し、オンラインテストにつながるQRコードに加え、赤十字やIFRCのSNSやWebページにアクセスできるリンクも掲載しました。



当日配布したカード



現地の職員と一緒にブース設営！



# 当日の流れ：モーターケードから学校ブースへ

12月1日の当日は、まず午前中に、World AIDS Day仕様にデコレーションされた車で市内を走るモーターケードが行われ、その後ポートモレスビーナショナルハイスクールに会場を移し、各団体がブースを出して啓発活動を行いました！

パプアニューギニア赤十字社からは職員5名に加えて、赤十字ボランティアの皆さん2名が参加しました。

私たちのブースには、男女あわせて114名の学生が立ち寄ってくれ、ボランティアの皆さんを中心に、カードを配布しながら、HIVの基礎知識、赤十字の活動内容、ボランティア参加の方法を説明しました。会場では、HIVに関する劇や、HIVとともに生きる当事者からのスピーチも行われ、数字だけでは見えないリアルな思いや経験が共有されていたのが印象的でした。

また当日の様子は地元のテレビ局のニュースでも紹介され、赤十字のブースでの活動風景も放送されました。赤十字の取り組みを知ってもらおうと、良いアピールの機会になったと思います。

参加した学生たちからは、

「HIVに関して、赤十字ではどんな活動をしているのか？」

「赤十字のボランティアになるにはどうしたらいいのか？」

といった質問も多く、HIVそのものへの関心と同時に、赤十字活動への興味の高まりも感じました。

今回参加してくれたボランティアのお二人は今年ボランティアに登録された方々で、保健分野の活動に強い関心を持っていました。

「World Diabetes Dayに続いて参加したが、今後もこうした活動に積極的に関わっていきたい」と話されていて、とても心強く感じました。



## WORLD AIDS DAYを「継続」へ

またWorld AIDS Day 前には、ルマナさんと一緒に、ラジオ番組に出演する機会もありました。

HIVの基本的な知識や感染経路、検査・治療の重要性に加え、相談窓口や赤十字の活動についても紹介し、学校・地域ではなかなか情報に触れにくい方々にも、メッセージを届ける場になったと思います。

World AIDS Day 当日にとどまらず、こうした機会を通じて、少しずつ継続的な啓発につなげていければと思っています。

今回の活動では、配布カードやオンラインテスト／アンケートの導入も含めて、企画や調整、当日の様子をふりかえるモニタリングという面も意識しながら関わりました。

目の前の保健教育の場をつくることと、事業として計画・運営し、次につなげていくこと。その両方を行き来しながら考えることが大事なんだと実感しました。

また調べる中でパプアニューギニア国内でも州ごとにHIVの状況が異なることを知り、今後はそうした背景も意識しながら活動に関わっていきたいと思っています。

こうした機会をいただいていることに感謝しながら、ボランティアの皆さんや現地の方々と一緒に考え、動きつつ、少しずつでも保健活動や赤十字に対する理解と、支え合いの輪を広げていけたらと思います！

